

2006年12月8日
教育委員会定例会資料

平成18年度30日美術館開催要項

1. 目的

第6回「藤沢市30日美術館」は、この湘南地域に拠点を持ち、意欲的に創作活動をおこなっている作家の作品を展示・紹介することによって、市民に魅力ある作品を鑑賞する場を提供し、本市の芸術文化活動の発展・振興をはかるものです。

2. 会期

2007年1月23日（火）～2月25日（日）

搬入：1月17日 搬出：2月26日

3. 会場

藤沢市民ギャラリー常設展示室（168㎡）

4. ジャンル

美術・工芸部門

5. 企画

今年度は、被爆の実相を描いた水墨画家丸木位里[いり]、洋画家丸木俊[とし]夫妻の遺作「原爆の図」シリーズ。30年を要して描かれ、第1部「幽霊」（1950年）から第15部「長崎」（82年）があり、第1部から第6部までを藤沢市片瀬で制作しました。

今回の展示の中心は、《原爆の図》が生まれるまでの人体デッサン16点のほか、原爆の図第1部と第2部の間に制作され、未完ながらもその迫力を十分に伝える《夜》、江の島から描いた《海》を含む油彩画・水墨画など計27点を展示致します。

6. 入場料 無 料

7. 主催

藤沢市教育委員会・藤沢市30日美術館実行委員会

8. 事務局

藤沢市教育委員会生涯学習部 文化推進課

〒251-0026 藤沢市鵜沼東8-1（藤沢市民会館内）

TEL/FAX 0466(23)2415 / (25)1525

2006年12月8日
教育委員会定例会資料

第6回 藤沢市30日美術館

藤沢と丸木位里・丸木俊展

丸木位里は、1901年広島県安佐郡飯室村に生まれ、若くして広島の画壇で注目を集め、やがて上京し田中頼璋氏から日本画について師事。その後青龍社や歷程美術協会、美術文化協会などで活躍。当時流行していた前衛美術シュルレアリスムの影響を強く受けながら、ほぼ独学で「雄大で繊細な」水墨画の新しい表現を模索しました。

また、丸木俊（本名俊子）は、1912年北海道雨龍郡の寺（赤松家）に生まれ、女子美術専門学校で洋画を学び、二科展に出展。戦前はモスクワ、ミクロネシアに長期滞在。美術文化展や前衛美術展、さらに女流画家協会展に出展。民話、創作、記録のあらゆる分野の絵本を手がけ数々の賞を受けました。

1945年8月6日、人類史上初めての原子爆弾が広島に投下されました。当時東京に住んでいた位里が知ったのは「広島に新型爆弾が落とされた」という情報だけで、いったい広島はどうなってしまったのか。位里は原爆投下から3日後に広島に行き、何もない焼け野原が広がるばかりの光景を見ました。俊は後を追うように1週間後に広島に入り、ふたりで救援活動を手伝いました。

しかし、俊は本人が気付かない中、原爆症に罹ってしまったのです。

1948年絵本作家の筒井敬介さんの紹介で、俊の病氣療養を兼ねて藤沢市片瀬に移り住みます。東京から遠く離れてしまったため、仕事も遠くなり、収入の道も途絶えました。だが、暇が出来て絵を描くときが来たのです。食料の足しにと荒地を耕し芋を作り、少しずつ体が良くなっていくように思えました。貧しければ貧しいように、戦争さえなければ飢えると言うことはなかなかないのです。そんな恢復に向かう雨の日の夜に、二人は原爆を描こうと気がつき《原爆の図》のデッサンをはじめたのです。

また、この時期絵本作家「岩崎ちひろ」さんをはじめ、県立湘南高校（1948～）の学生達を集め真ん中にモデル（主に位里さん）を置き丸く車座になってデッサン会を催し、俊さんがアドバイスを رفتりしていた時期です。

それから5年後、1950年2月に日本アンデパンダン展で《原爆の図 第1部 幽霊》が発表されたのです。数年間描きあぐねた「原爆」を、水墨画家の位里と油彩画家の俊の共同制作で、やっとかたちにすることができたのです。はじめは1作をと考えていましたが、その後は3部作にと考えていた《原爆の図》は、とうとう第15部「長崎」まで広がりました。そして、1953年には《原爆の図》で世界平和文化賞を受賞しました。

その後も夫婦で、反戦・平和をテーマに活発な芸術活動を展開し、芸術文化の向上に多大な貢献をしました。そして原爆の残虐性、戦争による人間性の破壊など作品制作を通して、平和の尊さと環境の大切さを世界に向けて訴え続けたのです。戦争の記

憶を喚起するようなストーリー性を色濃く持ち、同時に彼らの体験をはるかに超える現実の被爆体験を想像させる力を持ったからこそ人々をひきつけたのでしょう。初期《原爆の図》がそうした力を持ち得たのは、そこに多様な体験の断片が集積されているからです。

今回の企画展では、《原爆の図》を描くまでを焦点に当てながら、これまで展示される機会の少なかった二人の片瀬で描いた《原爆の図》デッサン、原爆の図第1部「幽霊」と第2部「火」の間に制作され、未完ながらもその迫力を十分に伝える《夜》や油絵の個人作品を中心に紹介します。